

所属	リハビリテーション学研究科 リハビリテーション学専攻 修士課程	修了年度	平成 28 年度
氏名	大久保 理恵	指導教員 (主査)	立石 雅子

論文題目	慢性期失語症者における代償手段による伝達力の改善について
------	------------------------------

本文概要

失語症者の実用的コミュニケーション手段には、事物の絵や文字などをカテゴリー別に貼付したコミュニケーションノート、描画、ジェスチャーなどがある。描画やジェスチャーはコミュニケーションノートに比べ、獲得に時間を要するが、語彙に制限がなく、話題が限定されないという利点や、獲得の過程あるいは訓練が言語活動の促進や自発性の向上につながったという報告例もある。また、描画やジェスチャーの獲得訓練に関する報告の中には動作性 IQ や言語理解力が関係すると指摘するものもある。描画やジェスチャーは言語機能や知的機能と関連のあるコミュニケーション補助手段と言える。ただし、獲得訓練の報告では介入期間や介入頻度、代償手段の獲得基準が不明確である、などの問題点が認められる。また、代償手段を獲得することによって実際の日常コミュニケーション能力の向上が認められたか、という点まで検討されているものは少ない。

そこで、今回、表出による意思伝達が困難な慢性期失語症者 7 名に対して、指導内容や代償手段の獲得基準、介入頻度を統制した描画・ジェスチャーの獲得訓練を同時期に並行して行い、積極的に代償手段を導入し、(1) 代償手段の獲得訓練の結果、(2) 生活場面における伝達意欲や伝達力の変化、(3) 代償手段の獲得と知的機能ならびに言語機能との関係について検討した。

その結果、代償手段の獲得については訓練語では訓練終了直後で、ジェスチャーに比べて描画の成績が有意に高いという結果が得られた。また、描画の訓練語の成績については訓練前に比べ訓練終了 3 か月後でも高く、訓練終了直後と訓練終了 3 か月後との間には有意な差を認めなかったことから、訓練による効果は訓練終了 3 か月後まで維持されることも示された。生活場面における伝達意欲や伝達力については日常生活場面を想定した課題において、訓練開始時には無反応だった事例が訓練終了後には正しい表現には至らなくても伝達を試みるようになった。また、その他の対象者においても会話の中で描画やジェスチャーを使用する様子が観察されており、積極的な代償手段の訓練は、伝達意欲や伝達力を高めることが示された。代償手段の獲得と知的機能の関係では、訓練語では訓練前後の描画・ジェスチャーの成績と知的機能との間に相関を認めなかった。このことは、描画であれ、ジェスチャーであれ、代償手段の獲得の成否に知的機能の程度は大きな影響を持たないことを示すものと考えられた。言語機能との関係においても訓練終了直後では訓練語、非訓練語とも有意な相関を認めず、言語機能の障害の程度も大きな問題とならないという可能性が示唆された。獲得訓練の成否に影響する他の要因の検討が今後、必要と考えられた。